

## 「01——ロイヤル・コート・シアター」

スローン・スクエア、ロンドン、2000

参照 | 本誌pp.9-11

ロイヤル・コートは、ウォルター・エムデンとバーティー・クルーが設計した1888年創建のヴィクトリア朝劇場である。1956年からイングリッシュ・ステージ・カンパニーの本拠となつた。イギリス近代演劇の搖籃地であり、ベケット、ピーター、オズボーンといった劇作家の初期の上演の痕跡を残している。当時も今も、すでに評価の定まつた演劇人か新しい才能かを問わず新たなドラマツルギーに留意した場であり、キャリル・チャーチル、マーティン・クリンプ、サラ・ケイン、マーク・レイヴンヒルといった新演劇の作家たちと仕事している。1990年代初頭に危険なまでに老朽化が進み、観客にも役者にも満足のいくサービスを提供できなくなっていた。その改築計画はハワース・トンプキンズ事務所に委ねられた最初の重要な仕事となった。ハワース・トンプキンズは、多くの者にとって演劇の聖地だった場で繊細かつ決然と仕事をし、積層した歴史を蘇らせた。また保存すべきものと、侵略的な改造も含めて改築す

べきものとの細やかな選択を行つた。歴史的な側面は、修復されたファサードと約400席のメイン・ホールに残された。メイン・ホールは無駄を削ぎ落した姿に戻され、最も視認性を得るために開発された新しい座席を備えている。一方、通路と設備の設置によって既存のテクスチャーとの魅力的なコントラストが生まれた。上の階に新設された85席の劇場/スタジオは、天井を高くし柔軟性を挙げるために設計し直された。カフェテリア、レストラン、ブックショップは、劇場前広場の下に掘られた地下増築部に置かれ、メイン・エントランスと直接連絡する。バックステージ、樂屋、水廻り、その他の21世紀的要件に応える付随的エリアは、側面ファサードの背後に置かれた。そのコルテン鋼と木材で新築された側面ファサードは、劇場の現代的性格を外部に向かって主張する。一方、広場からは、透明性を与えられたメイン・ファサードを介して、ホールを包む壁面の、芸術家アントニ・マリノフスキイが制作した巨大な赤い壁画が見える。「ウォールドローリング」は小さなホワイエを視覚的に拡張して、入場していく観客を迎える空間を作つてゐる。ハワース・トンプキンズの仕事は、新たな地層として建物に接ぎ木され、



側面ファサード



ホワイエ

既存の積層に加えられた。今日でも伝統の連続と、設計計画においても建築においても新たな実験とを表現する場において、これ以上ない一貫性を有している。

設計:ハワース・トンプキンズ

建築主:English Stage Company

施工:Schal | プロジェクト・マネージャー:Tony Hudson

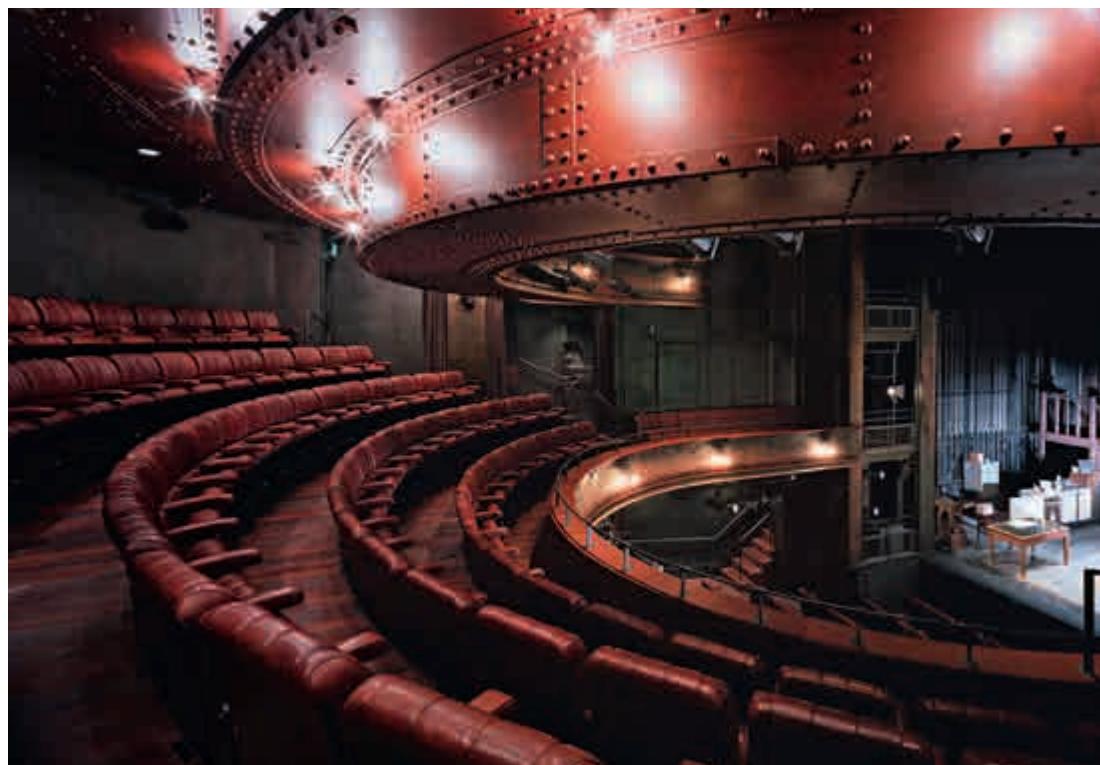
構造:Price & Myers | サービス・エンジニア:Max Fordham

工費管理:Davis Langdon | 劇場コンサルタント:Theatre Projects

音響コンサルタント:Paul Gillieron Acoustic Design

ファサード・コンサルタント:Montresor Partnership

協働アーティスト:Antoni Malinowski



メイン・ホール



平面図/断面図

## 「04——エヴリマン・シアター」

ホーブストリート、リヴァプール、2013

参照 | 本誌 pp.17-20

このプロジェクトによってハワース・トンプキンズは9年にわたる長い研究を完成させ、2014年のスターリング賞を受賞した。新たなエヴリマン・シアターが取って代わった既存の劇場は、19世紀の礼拝堂を転用したもので、急速に拡大する製作・参入計画に応えるための新たな空間を必要としていた。改築計画の目的は、先端技術、高いエネルギー効率と汎用性を供えつつ、心地よさ、統合、創造性という旧劇場の精神を維持することでリヴァプールの住民の集合的アイデンティティに実体を与えられる劇場の創出だった。

建物に関しては実質的にゼロから新しく建てられたが、メイン・ホールのヴォリュームに既存の礼拝堂の煉瓦を

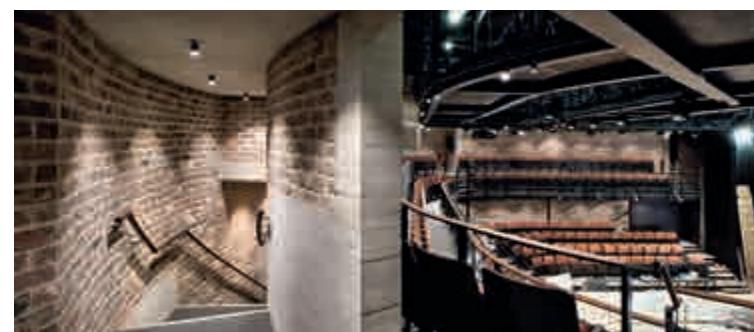
再利用することによって、過去の記憶が保存された。メイン・ホールを囲む観客用通路は、エントランスから、街路と連続性のある透明なメイン・ファサードの内側にビストロ、レストラン、バー、テラスが3層に分かれて配された流動的な大空間を横切っていく。

アーティストのアントニ・マリノフスキはホワイエの天井に絵を描き、煉瓦、スタイル、木材、着色された石膏、現場打ちされたコンクリートといった素材からなる屋内の色彩を完成させた。

エヴリマンは新しいドラマツルギーに特に着目した劇場で、脚本に特化したさまざまなプログラムやサービスを提供している。劇場の建物には数多くの製作スペースが含まれ、リハーサル室、工房、AVスタジオ、ホワイエに面した「作家部屋」、青少年とコミュニティ向けの養成活動のためのホールがある。オーディトリウムは400人が収容できる空間である。設計案の最も特異な点は外被にある。



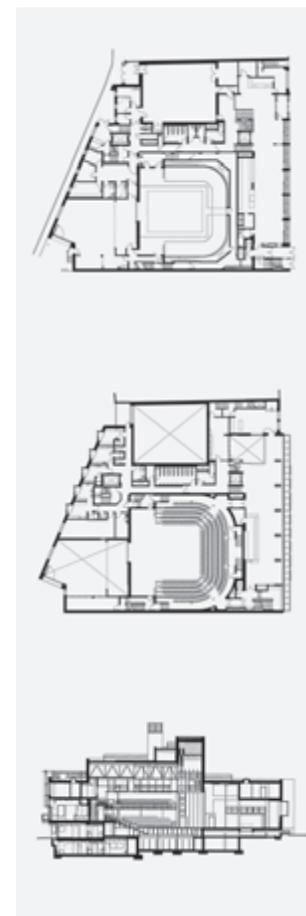
メイン・ファサード



左に通路、右にメイン・ホールを見る



エントランス・ホール



平面図／断面図

メイン・ファサードは105個のアルミニウムによる可動式のパーツからなる巨大な芸術作品であり、それぞれリヴァプール市民の横顔が実寸大で刻まれている。この「ポートレート・ウォール」は直射日光から屋内を保護するだけではなく、住民全体の集合的アイデンティティを具体的に確立し直す。異種混交的な都市コミュニティを巻き込んだ一連の公開イベントの間に、住民たちは写真家のダン・ケニヨン(4,000点以上の肖像写真を製作した)によって不滅の存在になった。こうして、エヴリマン・シアターはすでに車道から自らの使命を提示する。すなわち、文化的包摂、市民参加、活発な創造性という諸価値を具体化する公共空間であり、劇場が都市との関係において有する社会的役割を主張するのである。

設計:ハワース・トンプキンズ

建築主:The Liverpool and Merseyside Theatres Trust

施工:Gilbert-Ash

プロジェクト・マネージャー:Gva Acuity

構造:Alan Baxter &amp; Associates

サービス・エンジニア:Waterman Group

工費管理:Gardiner &amp; Theobald

劇場コンサルタント:Charcoalblue

音響:Gillieron Scott Acoustic Design

インテリア・調度:Haworth Tompkins With

Citizens Design Bureau

タイポグラフィ:Jake Tilson

ファサード揭示肖像画用写真撮影:Dan Kenyon

協働アーティスト:Antoni Malinowski

## 「05——ブッシュ・シアター」

アックスブリッジ・ロード、ロンドン、2017

参照 | 本誌pp.21-23

ブッシュ・シアターはパスモア・エドワーズ・パブリック・ライブラリーのヴィクトリア朝建築の中にある。1895年に建設された建物は、図書館が新館に移った後、2008年から使われていなかった。他の事例と同様に、同じシェバーズ・ブッシュ地区のパブの上階にある80席の小劇場に40年間も置かれていたブッシュ・シアターは、強力な創造的原動力のある製作活動に応えられる、また地元コミュニティに歓迎される新たな本拠地を必要としていた。ハワース・トンプキンズ事務所に依頼された仕事は2段階に分けられた。まず新本拠地に実験的かつ暫定的に入居した後、継続的な助言と集会のプロセスを経て、改築を伴い、将来の入居者の要求に耳を傾けられるものとなった。第1期では、かなりの低予算でオーディトリアム、ホワイエ、舞台演出のための基本的ヴォリュームが実現された。劇団が新拠点に慣れ、劇団とコミュニティの諸要求に応えるための、必要不可欠な設備である。

こうしてより厳密に建築的な設計案が有すべき諸要件

が明確になり、第2期において実行に移されて先ごろ完成した。工事によって、スタッフにも役者にも最良の建物が提供され、新しいホール／スタジオと住民に開かれた集会とイベント用のスペースが追加された。またホワイエが拡張されて、側面入口——道路から直接アクセスできる——の新しい中庭と連結された。この新エントランスはガラス張りのヴォリュームとして形づくられ、突き出たビームによってブッシュ・シアターの存在を知らせ、観客に入場を促す。劇場のメイン・ホールは180席あり、アーニー式、プロセニアム式、張り出し式と舞台平面を変えられる柔軟な構成を持つ。観客数70人のスタジオは同様の空間的ヴァリエーションをもつ。屋根裏は設備が整い、自然光で照明されたリハーサル・スペースとされ、現場で新作の製作とリハーサルができるほか、コミュニティのイベントに使える追加スペースとなっている。「ライターズ・ルーム」は脚本執筆に特化した個室である。またカフェは図書館とホワイエと一体化され、道路に面した空間であり、1日中勉強と仕事の環境を提供する親密で家庭的な雰囲気を醸し出す。ここでもやはり、アントニ・マリノフスキの作品が置かれ、空間にフォルムと個性を与えていている。



カフェ／ライブラリー

設計:ハワース・トンプキンズ

建築主:Bush Theatre

現場監理:Plann | 構造:Momentum Engineering

サービス・エンジニア:Skelly & Couch

工費管理:Bristow Johnson

劇場コンサルタント:Plann

音響:Gillieron Scott Acoustic Design

ケータリング・コンサルタント:Keith Winton Design



ガラス張りのエントランスを見る



スタジオ



メイン・ホール



平面図／断面図



ホテル本館:道路側の中央部分



ホテル本館:「洞窟」



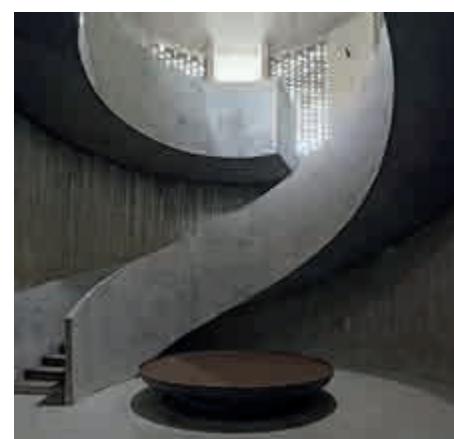
左にロッジ棟を見る



ロッジ棟:中庭



地下スパへの入口



地下スパの階段室

の採用によって実現した。表面が非常に滑らかになるように、ポリ塩化ビニル製の再利用可能な型枠にバイブルータなしで打設し、その内側にセットした細い鉄筋によって補強されている。続いて、型枠から素早く取り出せるよう特別に開発された機械を使って、各ブロックが取り出された。コンクリートが固まる間に手作業で研磨することによって、ブロックの厚みに含まれる骨材が見えるようになり、それらを組み立てた時に壁全体の表面が滑らかになった。

ブロックの空洞部分に雨水が溜まるのを避けるため、各部材の端部では、その断面が屋内側の3cmから屋外側の2.5cmへと変化する。石とコンクリートのスクリーン全体は、接合部に設置されたコンクリート部材と石材の中に開けられた穴に鉄筋を通して補強されている。離れて見ると、ほぼ完全にグレーの建物に感じられる。この印象は近づくにつれて消え、複合的で、構造的ではない壁の豊かさに気づかされる。また打ち放しコンクリートの隔壁も、3種類のモックアップを使った一連の実験の最終成果である。モックアップは職人たちに打設に慣れもらうためと、建築家たちが望んだ表層の効果を実寸で検証するために制作された。この場合、職人による型枠製作こそが重視され、打設の際に残された型枠の跡を介して、2つの新築ヴォリュームの装飾的機構に寄与する手段とされた。2棟の端部は外装用パネルを釘打ちし、敷地にすでにあった建物のファサードの煉瓦の列と同じ高さに合わせている。工法が明瞭に露わになるのは、軸と軸の接合部にコンクリートの滴りが溜まったところと、両側をつなぐために使ったシリnder状のセバレータ孔を封印した箇所である。この不完全さを隠そとせず、むしろ仕上げのうまいかなかつた部材を金槌で粗面仕上げにして際立たせている。

アリラ・ヤンシュオ・ホテルでは、設計の初期段階から探求され、表層の複雑さを介して効果をコントロールした、建築的プロセスの最終結果として建築空間が現れる。表層の複雑さは、現地の建設状況を巧みに利用することによってのみ得られたものだ。知性に裏打ちされ洗練された創造プロセスを伴うこの姿勢は、今後ヴェクター・アーキテクツが進める設計的探究の指標となるだろう。

作品:アリラ・ヤンシュオ・ホテル(阿兩拉陽朔糖舎)

設計:ヴェクター・アーキテクツ(直向建築)——

## カルメ・ピノス

ケーションが開始された。今日でも、教育、諮詢、融資はH-FARM活動の中心であり続けるが、設立当初よりその形態は大きく様変わりした。

養成活動として、児童をはじめとする公衆一般に向けてデジタル競争力関連のテーマで各種サービスを提供している。大学は3年制の学部と複数の修士大学院を備えたレベルに達し、カ・フォスカリ大学と提携している。教育分野の社長として同大から迎えたカルロ・カッラロは、環境経済学教授で気候変動の研究者として国際的名声を博している。CEOのドナドンはこの養成方法に次の意図を込めている。「新世代との対話の窓口を開くこと、それは単に義務であるばかりか、われわれが前進したいならば不可欠でもある。なぜなら子供たちはデジタル世界に生きており、一定の成果になぜ達したかを問うことなく、それを越える目標に着手するからだ」。

### [H-FARMの挑戦]

H-FARMはじつに困難な諸目標を掲げる。コンサルタント・サービスを提供するインダストリー部門を成長させれば、実践面でのブレイク達成にも貢献するだろう。2019-20年度をもってすべての教育サービス方針が実働する予定である。

新キャンパスでは30ヘクタールを越える土地に学生と教育活動を迎える計画だ。敷地の半分以上を森が占め、スポーツ施設やレストラン、バーを備える。このプロジェクトには敷地を提供したカトリカ・アッシュラツイオーニ保険会社も、開発に必要な資金を出したCDP(預託貸付公庫)も参加する。効率を重視し収益を生む力に狙いを定めた野心的計画を軸に、公と民を巻き込む力が証明された——この企業のためだけでなく、シーレ川が蛇行して流れが緩慢になり、ヴェネツィアの干涸に注ぐ広い農村地帯にあっても。一地域のために、H-FARMの発展は800万ユーロを越える経済効果を生むことだろう。

### [編注]

マリオ・ダルコ(1950-)はエコノミストでオリヴィエッティ、ENEL、プロフィンテック、サン・パウロ等の企業経営にあたる。ゼネラル・マネージャーとしてイタリア政府イノベーション公社の経営を担当した。

### 「イグアラダの火葬場」設計=カルメ・ピノス

#### 長い歴史 フランチェスコ・ダルコ

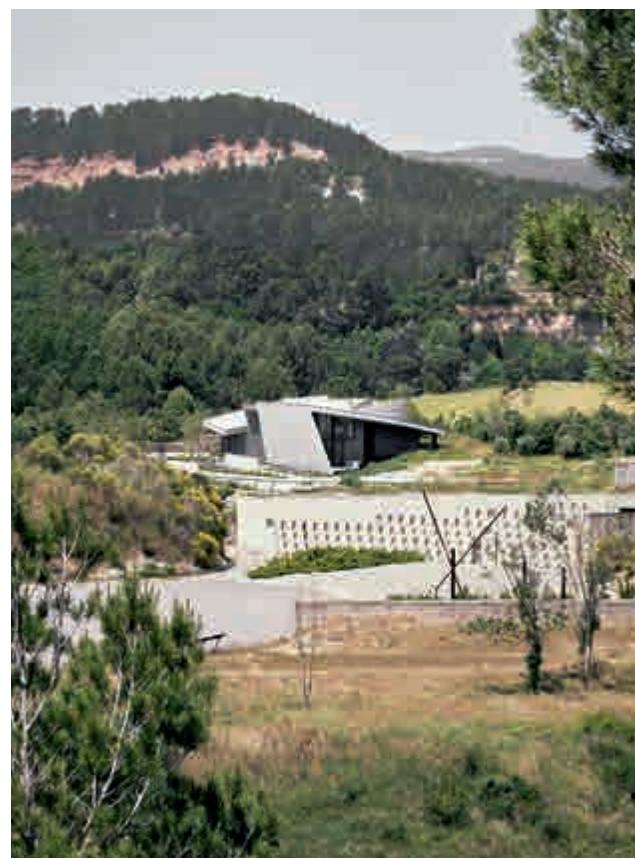
参照 | 本誌pp.72-79

エンリク・ミラージエス(1955-2000)の——特にカルメ・ピノスとともに1980年代に実現した——作品を論じた最も素晴らしい論考が、バルセロナのイグアラダの墓地を巡る煌めくようなページで始まるのも偶然ではない。イグアラダの墓地の設計は1985年に遡る。件の論考は「Per il momento... (今のところ……)」と題して、ファン・ホセ・ラウエルタが、ベネデッタ・タリアブーエが編纂しエレクタ社から出版された『エンリク・ミラージエス:作品と設計案』に発表した。初版は1996年である。「イグアラダの墓地は夕暮れ時の影のように引き延ばされている(……)。細い棒でできた扇の骨組(……)、工場や倉庫が建ち並ぶ荒廃し、薄汚れて混乱した風景にできた傷口か切り口のようだ」。「ブルータルで故意に武骨な」墓地は、ミラージエ



北西より見る

スピノスが手がけた他の作品とともに「傾いた平面」を形づくり「そこを偶像たちが降りてくる」。こう続ける前に、ラウエルタはカリフォルニアのアーティスト、マイケル・ハイザーの「アースワークス」と、イグアラダの墓地の平面構成に靈感を与えたであろう戦略とを結び付けるアーナロジーに注目する。ハイザーは「Sets(分散)」を実現するために、マッチ棒を紙の上に落としてそれぞれの位置を



墓地側より火葬場を見る



配置図/平面図/断面図

# CASABELLA JAPAN レクチャー

建築家はどのように世界を見つめたか——

建築500年のよみなおし

横手義洋

## 第9回——社会に資する建築

### 近代建築の多面性

今日のわれわれにとって近代建築は、振り返るべき過去の重要な参照点です。そのように言われるのは、いまなお未解決のさまざまな建築的問題が近代に根ざすとされるからです。都市の過密化、建築の高層化、職住の関係、環境破壊、交通渋滞、工学と芸術の分離、挙げていくときりがありません。良くも悪くも、近代がもたらした成果のうえにわれわれの世界があります。

ところで、「近代建築とは?」とたずねられたとして、あなたはどのように答えるでしょうか。装飾の少ない建築、抽象的な立体表現による建築、という答えが頭に浮かんだとしたら、あなたは近代建築の見た目や外観について回答をしたことになります。合理性や機能性、科学的かつ実証的な根拠に根ざす建築、などと答えるなら、近代建

築が立脚する思想背景に注目したことになります。機械生産のシステムに応じた建築、工業製品化された建築、などと答えるのであれば、近代建築を生み出す生産手法を重視したことになります。鉄とガラスとコンクリートが多用される建築、という答えであれば工業的な材料に注目したことになりますね。こうした例が示すように、近代建築を特徴づける要素はさまざまにあり、捉えるレベルによってさまざまな答えが導き出されます。

以上に関連して、近代建築という言葉自体の問題もあります。近代建築に対しては、大きく、近代という時代につくられた建築という捉え方と、近代運動の思想を反映した建築という捉え方があるでしょう。前者は後者を包含します。ときに両者は混同されることもあります。とはいっても、両者は始点のとり方においてずいぶん差があります。前者は産業革命やフランス革命を根拠に18世紀末を起点にしますので、かならずしも工業的な建築だけではなく、歴史様式をまとった建築や、装飾性に富んだ建築も対象に含みます。一方、後者は1920年代に本格化する近代運動(モダン・ムーブメント)を対象にしますので、始点を第一次世界大戦前後に定めます。後者については、モダニズム、近代主義という言葉が用いられることもあります。

近代運動については、ル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエといった建築家のキャリアに重ねて理解される傾向が強いように思います。両者ともに1880年代後半に生まれ、1960年代に没しました。近代運動の中心的建築家として新しい建築のあり方を普及させ、戦後にまでその影響力を残しました。少し年上ですが、ヴァルター・グロピウスもほぼ同じ世代と言つていいでしょう。この三者をモダニスト建築家の三傑とすることがあるようですが、その業績の大きさもさることながら、やはり建築家として生きた時代の重なり、すなわち世代の一致が大きいように思います。ル・コルビュジエとミース・ファン・デル・ローエはアカデミックな建築教育を受けていない点でも共通します。彼らが、まともな建築教育を受けなかったからこそ、革新的なモダニズムに邁進することができた、などと言われるとなかなか複雑な心境になりますが。

建築の芸術的な伝統を否定し、工学主義的な主張を展開できた彼ら共通の出自に、ドイツやスイスといった実用志向の強い土地柄を指摘することもできるでしょう。その地域的傾向は近代運動を支えていく「工作連盟」という組織に結実していきます。ドイツやスイスで結成された工作連盟を中心に、フランス、イタリア、ベルギー、オランダ



Fig.1:ハンス・シャロウン |  
ハンス・シャロウン邸、ヴァイセンホーフ・ジードルング、シュトゥットガルト、1927



Fig.3:ハンス・シャロウン | シュミンケ邸、ザクセン州レーバウ、1933 | 内観



Fig.2:ハンス・シャロウン | シュミンケ邸、ザクセン州レーバウ、1933 | 外観